

子育てにおける夫婦の連携 (4)

夫婦の連携とその中身を問う

名取 明美

双子の誕生

平成元年に双子の男児が生まれてから我が家の子育て戦争は始まった。

私にとって初めての出産が双子ということ、自分の仕事とのからみでの夫との関係、実家との関係、様々なことが怒濤のように押し寄せてきたのがこの六年間であったと思う。

私は公民館という職場で社会教育の仕事に携わってから十五年目に入った。市役所の職員なのだが、勤務形態は不規則で、月曜休館の他は土曜・日曜が隔週で休みである。市民会館が併設されているため、その催し物や日

曜日に行く主催事業などがあれば日曜日も夜もなく、過去においては連続二か月、日曜休みがなかったという悲しい実績も残している。それに加えて午後十時までの夜間の勤務(当直)というのが今年三月まで毎週一回あり、現在は午後出勤で夜九時までという時間帯に変わったが、それまでは朝八時三十分から午後十時までの勤務時間であった。

当直の時と夜間の講座などがある時は保育園の子どものお迎えを友人に頼み、仕事を終えてから私か連れ合いが友人宅へ迎えに行き、帰宅すると午後十一時近くになることもあった。

子どもを産んで一年間は産休・育休をとり、子どもが九か月のときに職場の近くの保育園にあずけて職場復帰した。

一人をおんぶし、一人はチャイルドシートに乗せて保育園へ行く。二人分の布おむつとよだれかけ、着替え、おむつカバー etc……。二年経たないうちにあまりの重さにバッグの取っ手がはずれた。おんぶ紐も一本切れたほど一日中おんぶしていた。なにせ一人で二人をみなければならなかったのだから。

雨の降る日は最悪だ。背中に一人を背負い、肩に自分のバッグをかけ、右手に男性用の傘をさし、左手に子どもを荷物を持っていく。雨の日は濡れてしまうからおんぶに抱っこはできない。そこで、車と園とを二往復する。梅雨時ならこれを毎日繰り返す。保育園が早く終わってほしいと切実に思った。頭には『遅刻』の文字と上司の顔が浮かぶ……。

この時私は思った。『双子を育てる事の大変さは二倍ではなく二乗だ』と。一人が泣けばもう一人も泣く。一

人が風邪をひけばもう一人にもうつる。一年間は週に二〜三回医者通いしたのではなからうか。

一日のおむつが六十枚、何と二・二kgの二槽式の洗濯機だったからたまらない。今思えば壊れていなくても全自動洗濯機に替えてしまえば肩を痛めずに済んだかもしれない。おんぶに抱っこ状態のため、片手で家事育児をこなしていたのである。それに加えて掃除（はほとんど手が回らなかった）、炊事。買物などどうやっていたのか思い出せない。しかも二人して二歳になるまで夜泣きが続いていた。

こんな状況であったから、出勤してから『そう言えは夕べご飯を食べずに寝てしまった』ということに気がついたなどということはよくあった。とにかくにも筆舌に尽くし難い〇〇一歳児時代であった。

「何て俺がやらなきゃいけないんだ！」

二人の父親だが、ここでは『彼』という名称を使うことにする。

彼の仕事は大工。自営業だが私は不自由業と読み替えていた。サラリーマンと違って定休日がない。結婚式だの何か特別な用事がなければ休まない。最近では日曜休みの大工さんが普通になっているようだが、彼のところは年中無休だ。日給月給だし、工期があるので少しでも仕事をしようという気になるのかもしれない。

結婚する時、私が仕事をするのは賛成ではなかった。後で聞くと、子どもが産まれれば辞めるのではないかと思っていたとのこと。もともと男女平等ということが大嫌いで、『男は仕事、女は結婚したら家庭にいて子どもを産み育てるもの』という考えを持っているため、子どもが産まれてからの夫婦喧嘩は一年目がいちばんひどかった。

というのも私は彼と正反対に位置する考え方を持っていたからだ。

『二人でつくった子どもなのだから子育ては共にするべきだ』というのが私の持論だ。もっと言えば夫婦共に家庭について共同責任で関わるべきと思う。基本的にこの考

え方がないと夫婦の摩擦は大きいのではないだろうか。

私も双子でなく一人であったなら、自分だけの頑張り育て上げてしまったかもしれないが、同じ年の乳飲み子が二人もいたら、『夫婦で子育て』という考え方を持っていなかったとしても、猫の手も借りたいほどの忙しさの中で彼に協力を求めるのは自然の成り行きであったと思う。

ところが……彼は何一つ手を貸そうとしない、ここから私たちの戦争が始まった。

例えばミルクだが、生後数か月で子どもも重たくなってくる。ある時一人の子におっぱいを飲ませていると、もう一人が泣き始めた。ミルクの時間なのだ。私はなるべく母乳を与えて抵抗力をつけたいと、頑張って二人に母乳とミルクとを交互に与えていた。間違えないようにノートに書き留めながら。

その時私はそばにいた彼に「ねえ、ミルク作ってあげて」と言った。すると彼は「何で俺がやらなきゃいけないだ！」と言うのである。育児に不眠不休の奮闘を続

けていた私の頭はいっぺんでぶつつんした。時間は昼間、夜中ではない。しかも彼は畳にごろんと横になっている。もう一人の子はおなががすいて泣き始めている。

それまで私は三時間おきのミルク（二人だと一、二時間おきの授乳になってしまいが）に始まって一度も彼にミルクを作ることを頼んだことはなかった。何となく母親である自分がやらねばという思いがあったのかもしれない。それでこの時のように二人が同時にミルクとなつた時は一人の子を乳房に含ませたまま、片手で抱っこした状態で、もう片方の手で哺乳びんにお湯を入れ、粉ミルクの蓋を開け、ミルクを作り、座布団でミルクを固定させてもう一人の子は寝かせた状態であげていた。足でよいよいしながら。どんな感じか一度試していただきたい。

その時私はカットとして言った。「どうして作ってくれないの！ 私は今まで子どもが軽かったから片手でおっぱいあげながら片手でミルクを作ってたけど、もう子どもも大きくなって片手で抱っこできないからミル

ク作ってって言ってるんじゃない。ミルク作るのが面倒くさいから言ってるんじゃないのよ、できないから頼んでるんじゃない！」。言っている私の目から熱いものが流れ出していた。

夏の暑い日、情けないような悲しい気持ちでいっぱいになった。「いいわよ！」とおっぱいを飲んでる子どもを座布団に無造作に降ろすと、その子はまだおっぱいが飲みたくて泣いた。そんな中で私は泣きながらミルクを作った。彼は黙っていた。

以後私は彼にミルクを頼んだことはない。

新婚早々こんなこともあった。

まだ子どももなく夫婦共働きでいつも私の方が早く帰るのだが、ある時彼の車が止まっており、珍しく帰宅していた。ペランダに目を止めると洗濯物のハンガーが出したままになっている。

「ただいまー、早かったのね。」と部屋に入り、洗濯物を取り込みながら、「洗濯物取り込まなくちゃだめじゃない」と言うやいなや、「何でそんなこと俺がやらな

きやいけないんだよ！」という言葉が返ってきた。私は詰問もしていないし、責めたつもりもなく、むしろ「だって今取り込まなくちゃせっかくの洗濯物が湿っぴくなっちゃうじゃない。先に帰った人が取り込んでいいんじゃないの」という言葉が自然に出ていた。

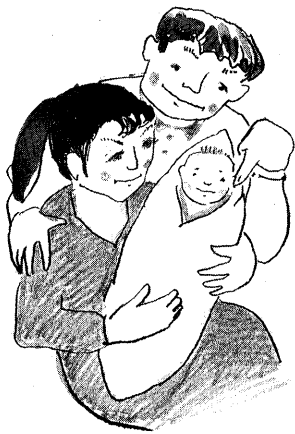
この時、私は彼の言葉に愕然とした。洗濯物を取り込むことくらいどうしてできないんだろう？ なぜこんなに怒っているんだろう？

またこんな事もあった。

平生頑丈な私も時には病気になることもある。具合が悪く珍しく布団で寝ていた朝のこと。仕事へ行こうとする彼に「今日ゴミの日だからゴミ持って行って」と言うのと、「何で俺がそんなことやらなくちゃいけないんだよ！」と寝ている私にふくれっ面をして言い返した。不機嫌な顔をしてゴミを持って行ったが、私は内心頼まなければ良かったと後味の悪さに後悔した。週三回燃えるゴミを出す日があるのだが、ゴミ出しはいつも私がしていた。けれど、自分は今日調子が悪く熱っぽくて寝てい

る。だからゴミ出しを頼んだのになぜあんな言葉が返ってくるのだう。そう思うと気弱になっているせいもあってたまらなく悲しくなってきた。「私を何だと思ってるんだらう？」こんな気持ちがわいてくる。

『男は仕事、女は家庭』と言ったって、これじゃああんまりひどすぎる。『思いやり』の問題じゃないのか？ 専業主婦の夫だってもっと優しい。家事育児は女の仕事と言ってる人でも妻が病気なら食事だって作るし子ども世話だってするはず……無理難題を頼んでるわけじゃない、目の前の駐車場のゴミ置き場へゴミを持っていく



ことひとつ、なぜ気持ちよくやってくれないのだろうか？
自分だつて出しているゴミじゃないか。彼にとつて私は
一体何なのだろうか？

その後彼は私の強い抗議にあい続け、ゴミ出しを渋々
やるようになった。しかし、それだけのことに三年もか
かった。

子どもも半年を過ぎたある木枯らしの吹く寒い日、ス
トープの灯油が切れた。二人の時間差攻撃のミルクに加
え、片時の暇もない（事実朝六時から起きると子ども
が夜寝つくまで、私は腰かけることもできなかったし、
トイレにも行けず膀胱炎になった。食事することもまま
ならなかった）。そんな毎日を送っていた頃、朝出かけ
る彼に「ねえ、帰りに灯油買ってきて。もうないし子ど
もが風邪ひいちゃうから」すると「何で俺がそんなこと
しなくちゃいけないんだよ！」とにらみ返す。口論の
末、「いいわよ、私が買いに行くから！」

私は自分が重いポリ缶を抱えることが嫌で頼んだので
はない。六か月というお座りもできない双子のいる暮ら

しというのは、外へ出ること一つが本当に大変なことな
のだ。まず、ミルクの時間をはずす。ウンチが出ていな
い時を狙う。どちらかが寝はじめたら一人をおいて行け
ないから二人が起きている時。洗濯、掃除、食事の支
度。もうこれで物理的時間はほとんどない。

その間隙をぬって外へ出るわけだが、冬ともなれば風
邪ひきが心配でいろいろ着込ませる。そんな時に限って
ウンチしたりする。子どももなく、から身なら、仕事帰
りに灯油を買う事など簡単なことだ。通勤は車なのだか
ら。それなのにどうして？ 自分だつて使う灯油なの
に。

結局その日私は寒い木枯らしの吹く中を一人をおんぶ
し、もう一人はバギーに乗せて空のポリ缶を持ち、近所
のスタンドへ歩いて買いに行った。道々、情けないよう
な惨めな気持ちで涙が滲んだ。どうして彼は私を助けよ
うとしてくれないのだろうか？

アパートは二階なのでまず子どもを一人抱っこして上
がり二人を降ろしてから、今度は満タンのポリ缶を運

ぶ。子どもがお座りもできない時、まだ小さい時、いろいろな場面で私はアパートの階段を二往復、三往復した。嵐の日も、残業帰りで遅くなり、子どもが車で寝てしまった時も。

その後、灯油買いについては頼まれると嫌な顔をして買ってくることもあったが、子どもの手が離れてからはいつしか頼まなくなっていく。

夫婦の絆

日本の男性の長時間労働と過労死が国際的にも問題となっているが、現実にはサービス残業といった事実はある。変わらない。

一方、企業戦士の夫を支えてきた妻が、これからは自分の人生だと定年離婚するのに対し、定年後は夫婦で温泉でもと考えている夫とのこの落差は何なのか。中高年離婚の大きな原因は夫婦が互いの人格を認めた上での支えあう関係、精神的絆をつくりきれなかったことにあるのではないかと思う。

子育て期は育児に家事にと忙しく過ぎていくが、子育て終了後の女性のライフサイクル第三期を迎え、自分の人生を見つめた時、夫との隔たりの深さに気づく。『家庭のことはお前に任せた』と仕事に人生を捧げてきた夫と家事育児だけを担ってきた妻とが向かいあった時、どんな会話ができるのだろう。家事育児を妻に任せっぱなしにしていた夫と定年後、どんな思い出話ができるのだろうか。

子どもを産み育て、末子が就学する前に自分の寿命が来ていたという時代と違い、今は出生率が一・四六人。子産み・子育てだけの人生は送れない。手本のない時代であるだけに、どのような人生を送るのかは一人一人の女性にとっても手探りであろうと思う。

高学歴の女性が増え、学生時代は男子に互していた女子学生も、結婚後、あるいは出産後ほとんどが専業主婦となっている。子どもを産み育てながら働くことのできる状況にある女性は数少ない。最近では再就職が増え、M時型雇用の底が平になってきているとはいえ、欧米並

みになるにはたっぷり時間がかかりそうだ。今後政策理念の大転換でもない限り、出生率もこのまま下がり続けるだろう。

すべての人間の奪い得ない権利として労働の権利があるのだが、女性が働く時、なぜ働くのか、いつまで働くのかといった愚問が通るのは、『男は仕事、女は家庭』という性別役割分業の固定観念が私たちの意識の中に根強く残っているからだ。ここの所を変えない限り、『夫婦で子育て』は夢物語だ。

人生の中で子どもが幼い時こそ、夫婦の絆がどれだけ強くなれるのか勝負所と思う。大変な時期を夫婦で共に乗り越えられるかどうか。子育てを通し、夫婦は互いの関係を深めあい、互いに理解し、高めあうことができる。それは互いの人格、人権を認めた上での支えあいができるかどうかということだ。

奇しくも今年には国際家族年。家族の中の人権が守られているかどうかが問われている。性別や障害の有無、年齢を問わず、家族の一人一人がその立場によらず人権を

大事にされることが求められている。夫婦もお互いを一人の人間として認め、その人格を大事にしながら暮らすことがいま問われている。

国際的にも女性差別の強い日本においては男性の意識改革が急務と言えるかもしれない。でなければ男女の溝は深まるばかりだろう。

それぞれの道

今年初夏に私たちは離婚した。この一、二年はこの問題でかなり深刻な場面もあった。

お互いの考え方の違いを彼は強調し、自分の新しい人生を歩みたいと言った。私は互いの価値観、物の考え方の違いはあっても、子どもを作ったという親としての責任、子どもを育てるといふ共同責任があるということを中心し譲らなかつた。考え方の違いも子どもを育てて生活して行く中でお互いに歩み寄れるのではないかという期待をかけていた。しかし、最後に彼が『逃げたと言われでもいい、妻子を捨てたと言われてもいい、俺はもう嫌

なんだ」と言った時、私の中で最後の糸が切れた。

『夫婦で子育て』このことの意味を私は今改めて問
い直している。

今、日本の若い夫婦のどれくらいが子育てを通し、互
いに絆を深めあっているのだろうか。家庭での民主主義
はどこまで貫かれているのだろうか。

やむじや

日本も批准した「女子差別撤廃条約」の中で、私はと
りわけ第五条（a）（b）項（注）が大事であると思う。

この中では男女が定型化された役割（性別役割分業）に
基づく偏見や慣習、慣行の撤廃を実現するために男女の
社会的、文化的行動様式を修正すること、そして『男女
の共同責任』をうたっていることに着目したい。

また、構成の都合上省略したが、子育て期は前述のよ
うな悲惨なことばかりではなく、大変な中にも楽しかっ
たこともたくさんあったことをつけ加えておきたい。

（福生市公民館）

（注）「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条
約」（抜粋）

第五条 締約国は、次の目的のためのすべての適当な措置をと
る。

（a）両性いずれかの劣等性若しくは優越性の観念又は男女の
定型化された役割に基づく偏見及び慣習その他あらゆる慣
行の撤廃を実現するために、男女の社会的及び文化的な行
動様式を修正すること。

（b）家庭についての教育に、社会的機能としての母性につい
ての適正な理解並びに子の養育及び発育における男女の共
同責任についての認識を含めることを確保すること。あら
ゆる場合において、子の利益は最初に考慮するものとし
る。